ガラスの墓標

今井泉

ガラスの墓標

今井 泉

文藝春秋

略歴／一九三五年、高知市に生れる。神戸商船大学卒業後、国鉄入社、青函、宇高連絡船の船長を歴任。一九八四年、「凍い海峡」で直木賞候補。一九九一年、「碇泊なき海図」でサントリーミステリー大賞読者賞を受賞。作品として他に「碧の遺稿」がある。高松市に在住。

ガラスの墓標

一九九三年五月二五日第一刷

著者　今井泉

発行者　阿部達児

発行所　株式会社文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三―二三
電話　(〇三)三二六五―一二一一

印刷所　凸版印刷

製本所　矢嶋製本

定価はカバーに表示してあります。
落丁乱丁の場合は小社営業部にて送料当社負担でお取替えいたします。

© Izumi Imai 1993

Printed in Japan
ISBN4-16-313990-7

目次

ガラスの墓標　五
涙い海峡　八三
道連れ　一四五
島模様　二一

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

ガラスの墓標

ガラスの墓標

結城が出勤してくると、待ちかねていたように甲高い声がかかった。
「課長、やっぱり来ましたよ」
二月に入ったばかりの日射しも窓を通せば暖い。椅子に腰を下ろし、先ずは煙草でも吸いたいところだが、その暇を与えてくれない。籔木が足早にやってきた。
高知市役所の社会部福祉課は結城の机を奥にして向かい合わせに並び、十人が働いている。採用されて三年目の籔木は通路に近い末席である。
「読んでみてください」
封書を机に置いた。艶のある広めの額が嬉しそうに輝いている。
「投書はお前の担当だろう。話してくれた方が早い」
手紙は福祉課宛で、すでに封が開けられている。いくら籔木の喜ぶ内容でも、朝から陳情や苦

情なら読まされる方の気は重い。
「せいゆうって……、知ってますか」
「せいゆう……」
だしぬけで、結城は一瞬どう応えてよいか迷った。長い間頭の隅に凝っていた記憶を突然ゆさぶられた感じだ。もう世間はすっかり忘れている名前だろう。今頃になってなんで訊く……と、不安にも似た思いが掠める。表情を抑え、結城はゆっくり封書の裏を返した。差出人は林崎邦彦、住所は東京都国分寺市と記されている。〝林崎……〟中味をとり出す手つきが変った。
「やっぱり読むんでしょう」
結城の慌てるさまに、籔木の笑いを含んだ声が遠のいていった。
〝父永之助こと病気治療中のところ、一月二十日永眠いたしました。生前の御好誼を感謝いたします。遺言に従いまして今度は長男の私が父の意志を引き継ぐ所存でございますので御通知申し上げます。従前通り毎月末に同額を送金いたします。御供用下さい。
追而
誠に恐縮ですが、昭和二十四、五年頃に、貴市の西部地区に在住していたと思われるせいゆうと呼ばれていた人物につき、その後の消息がお判りでしたらお知らせ下さい。右御願い申し上げます〟
結城は、毛筆で書かれた二枚の便箋を机に広げたまましばらく眺めていた。
「豆鉄砲でも喰らわされたような顔だな」

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

始業のチャイムが鳴り終る頃やってきた長峰が隣の席についた。接待用のソファーとテーブルで隔てた社会課の課長で、主に中小企業を担当している。結城とは小、中学校が同窓で言葉に遠慮がない。

「こいつが来たんだ」

結城は手紙を長峰に渡した。

「賭けに負けたわけか」

長峰は流し読みすると、籔木の方を見やった。目が笑っている。賭けとは大袈裟だが、望み通り昼飯をおごる約束にはなっている。

「何故だと思う……」

寄付の送金が再開される。福祉課にとって嬉しいことには違いないが、首を傾げたくなる。

「よほどの善人だろうな」

「それだけが……」

理由なのか、と喉元まで出かかった声を呑む。自分でもどうしてこだわっているのかよく判らない。

福祉課の記録によると、差出人の住所もなく、裏に小さく林崎とだけ記された封書が届きはじめたのは昭和二十年代の半ば頃からである。最初の金額は千円で、子供の教育にでも役立てて欲しいと手紙が添えられていた。それ以来送金は三十五年間、毎月欠けることなくつづき、しかも年毎に増額されている。結城が役所に採用された昭和三十三年にはすでに五千円にまで増え、初

任給一万二千円から考えても奨学金として充分通用する額になっていたようである。最後の年には一回の送金が十万円にまで達していた。不用心のように思われるが一貫して普通郵便の封書で送られてくる。住所を知られたくないためのようだ。

金額の変化を辿っていると、林崎なる人物の昇った地位の階段らしきものが窺えそうだが、三十五年間も寄付をつづけた意志はどこから来るのだろう。額の大きさは収入の一割を献金するというユダヤ教の信者を連想させる。二年前、結城が福祉課の椅子に坐るようになってから、毎月封書を手にする度に尋常ではないと感じていた。送金の総額は二千万円を超え、その間の複利を見込めば億に近い金額にはなるだろう。寄付金は林崎の願い通り、現在母子家庭の奨学金として運用されている。素直に考えれば、市にとっては有難い善意で長峰の言葉が最もふさわしいのかもしれない。

去年の九月、珍しく封書に手紙が入っていた。

〃……そろそろお別れするときが近づいた気がします。送金は息子に引き継がせるつもりですので……〃

前後の儀礼文にも筆跡の乱れが見えて病身とおもわれた。長年の市に対する厚意を思えばすぐにでも見舞いたい気持に駆られたが、住所が伏せられていてはどうしようもない。手紙を前に結城は心から頭を下げたい想いがした。同時に送金もこれまでだろうと想像していた。子供が遺産を受けるのは当然としても、少なくない額の寄付まで相続するとはとうてい考えられない。

福祉課で籔木一人が送金は再開されると言い張っていた。林崎の奨学金で大学まで卒業させて

もらっている。足ながおじさんだった人物の最後の言葉を信じたい気持がひときわ強かったのだろう。話のはずみで結城は昼飯を賭けることになってしまった。

〝林崎邦彦〟という新たな寄付主にも興味をそそられる。父親の善行を子供が継いだ。記者クラブにでも知らせてやれば飛びついてきそうな話になる。福祉課としても諸手をあげて喜ばなければならない。

〝しかし……〟と、結城は立場を離れたところで考えてしまう。

三十五年もの間毎月欠けることのなかった送金は、年毎に増額をつづけ、しかもその善行を子にまで引き継がせている。〝どうしてそれほどまでに……〟まれにみる善行には違いないとしても、行為の底に執念のようなものを感じるのは結城だけだろうか。

「せいゆうとはな……、懐かしい人間を訊いてきたものだ、覚えているか」

結城は小さく頷きを繰り返している。長峰と同じ小学校に通う腕白仲間だった時期に共通の思い出がある。だが結城には懐かしさだけで済まされない感情が湧いてくる。〝林崎とはどんな関わりがあるのだろう、何故突然に問い合わせてきた……〟簡略な手紙の文面からは何も汲みとれそうにない。豆鉄砲を喰らった表情は消えても戸惑いは残る。金や寄付には縁のない男だったはずだ。結城は記憶の糸を手繰りながら窓の外へ目を向ける。薄雲が広がってきて陽を遮り、空の眩しさが和らいでいる。

〝せいゆう〟と呼ばれている浮浪者がいた。どうしてそう呼ばれるのか、どんな字を当てるのか、

結城たち子供は誰も知らなかった。

せいゆうは市内を流れる鏡川に沿って折れ曲がる土手のくぼみに、小さな小屋を建てて住んでいた。竹を組み合わせた梁に拾い集めた板切れをたてかけ、それを荒なわや針金でとめ、隙間をぼろきれで塞いだ、いかにも浮浪者の小屋らしかった。

せいゆうは日に一度街に出ると物乞いをして歩いた。もとは外套だったらしいが、紺色もすっかり褪せてしまいごわごわと破れた服をまとって、伸ばし放題の髭面で片手に風呂敷包みをぶらさげている。ただ背筋を伸ばした大きい軀と、しっかりとした足どりが浮浪者にそぐわなかった。

ある日、家の近くの裏道でせいゆうに会った。包みから何か小さな物を落とし、気づかずに通り過ぎようとした。結城が〝落ちたよ〟と教えてやった。せいゆうは落とし物を大事そうに包み直すと近寄ってきた。体臭が臭ってきそうで嫌だったが黙って立っていると、せいゆうは何かぶつぶつ呟きながら結城の掌に小銭を握らせて立ち去った。当時、子供でも喜ばない小銭だったが棄てるわけにもいかず、そのことを帰ってから家の者に話した。

「浮浪者に金を貰ったのかい」

父や兄は大声で笑った。

せいゆうの住む土手は子供たちにとって楽しい場所だった。

もともと土手は本堤防の外にある畠を守るために造られた仮の堤で、細長い岡の連なりが芝辻りやお山の大将に格好の遊び場だった。土手に横穴を掘り、畠からかすめてきたさつま芋やえんどう豆をむし焼きにして喰べるためによく集まった。

夏、川泳ぎに疲れると、子供たちはせいゆうの小屋を覗きこむことがあった。せいゆうはどこで貰ってきたのか干からびた鮭の頭を火にかざし、火ばしで叩きながら満足そうな顔をしている。それを喰べたいとは思わなかったが、空腹も手伝っていかにも旨そうに見えた。

冬、芝焼きをして遊ぶとき、火が小屋に近づくと心配気に顔を覗かせるが、そんなことさえなければせいゆうは子供たちにかまわなかった。子供たちにとってせいゆうは川原や土手の一部だった。

「そう言えば……」

長峰は両足をソファーの肘掛けに載せ視線を宙に浮かしている。

「せいゆうを見かけなくなったのはいつ頃からだろう。土手から足が遠のいて間もなくだったような気がするが……、いつの間にかいなくなった」

「奴は死んだよ」

「そいつは知らなかったな」

長峰はたいして驚きも見せず、いつごろだと目で話の先を促している。

「俺達が中学校に通い始めた頃だ。鏡川にはまって死んでいる」

死にざまで話してやれば身を乗り出してくるかもしれないが、結城はわずらわしさを想って口を噤んだ。

「そんな昔じゃあ、いくら恩人の頼みでも知らせてやることもないわけだ。だいいち、皆が呼ん

でいただけで、せいゆうが本名かあだ名かも知っている奴はいないだろう」
「浮浪者だった男とどんな関係があると思う」
手紙を手にして真っ先に浮かんだ疑問をやっと口にした。
「感謝状を渡すときにでも当人に訊いてみるんだな」
長峰はあまり興味がなさそうだ。机に書類を広げはじめた。
なるほど感謝状のことなら今日にでも市長が言い出すだろう。林崎の奨学金で進学を援けられた児童は延べ百人を下らない。今まで幾度か話が出ては匿名のために立ち消えている。今度の手紙で初めて住所が判った。感謝状を運ぶ役目は当然福祉課が受け持つことになる。
〝東京まで出張か……〟手紙をファイル棚へ仕舞いながら、結城は妻の顔を思い浮かべていた。

「宇野からは寝台列車を使う。家を出るのは夕方でいいんだ」
結城は外出の身仕度をしている妻の靖子を目で追いながら言った。
「新しいワイシャツも要るでしょう」
買物に出掛けるつもりらしい。
結城は坐った膝の上へ感謝状に添えて贈るブロンズを載せている。重さを計る仕草から低い声で切りだした。
「せいゆうの墓を教えてくれないか」
長い間気づかぬふりを通してきた。今更墓参りを咎めだてするようで気が重かった。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com